松楓殿「松楓の間」再現展示

松楓殿は、1904年アメリカ・セントルイス万国博覧会にて日本館のメインパビリオンとして建設された建物です（設計は文部技師・久留正道）。1903年11月に材料が一式切組・荷造りされ、現地に輸送されました。屋根を葺く鉄板以外はすべて日本から輸送され、工事監督の村井三吾を筆頭に大工職人16名が渡米し、12月から3月にかけて本館を中心に工事作業が行われました。

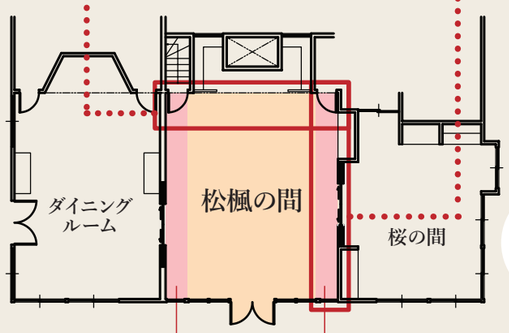
1904年、セントルイス万国博覧会の終了後に高峰譲吉が譲り受け、ニューヨーク郊外にある上流社会の別荘地メリーウォルドに移築しました。後にこの別荘は、枢密院顧問大鳥圭介により、「松楓殿」と名付けられ、日米親善の社交場や政財界の要人の迎賓館として利用されました。

このたび、博士がニューヨーク郊外で別荘として使用されていた「松楓殿」について、所有者から博士の生誕地である高岡へ寄付したいとの申し出を受け、高岡商工ビル1階ロビーでその一部を再現公開することとなりました。

ニューヨーク郊外にあった松楓殿「松楓の間」

鳳凰の欄間

中二階欄間



松楓殿
平面図

松楓の間壁面

松楓殿の家具調度品

1900年のパリ万博に出品されたとみられる荒木探令の「水墨雪中山水」。
荒木探令（1857〜1931）は日本画家（現山形県新庄市出身）。納富介次郎（現富山県立高岡工芸高校初代校長）に師事。陶画も得意とし、石川県で九谷焼の図案を指導したこともある。のち狩野姓となる。

春日式八足卓
松楓殿「松楓の間」用応接テーブル

青銅の仁王像。口を開けている像は「生命」、口を閉じている像は「死」を表すという。

1909年、久邇宮邦彦殿下夫妻が松楓殿に滞在される機会に手配されたと記録されている。明治天皇即位式のレプリカで、24弁の菊花紋がついている。

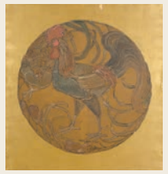
高峰博士は松楓殿の室内装飾を京都の芸術家である牧野克次に依頼し、牧野は壁と天井に松と楓を描きました。

内装設計担当者／牧野克次（1864年〜1942年）

守住勇魚に洋画を学んだ後、上京して小山正太郎の不同舎に入りました。1901年、松原三五郎らとともに関西美術会創設の発起人となり、翌年京都高等工芸学校が創設されると助教授となりました。京都で私塾を開きますが、1903年、浅井忠が聖護院洋画研究所を開設すると参加。1906年、関西美術院創設に参加します。同年渡米し高峰譲吉別邸「松楓殿」の室内装飾を手がけます。1910〜12年にはニューヨーク・リバーサイドドライブの高峰本邸の室内装飾と設計も手がけました。1918年、帰国後は東京に住み、制作からは遠ざかりました。

松楓の間天井画

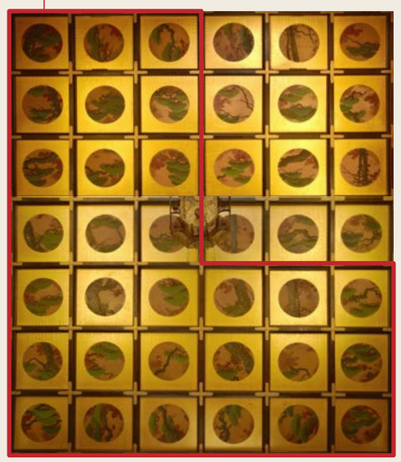
桜の間天井画



ダイニングルーム
天井画

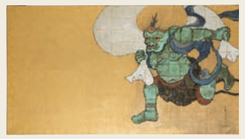
再現展示された天井部分

正面



松楓の間天井（移設前）

牧野克次の壁画
松楓殿内の装飾を手がけた、牧野克次が描いた松楓の間壁画。金箔地に能の一場面が描かれている。



風神雷神図

魚鼓　慶応元年(1865)9月
魚鼓とは主に禅宗で用いる鳴物の一種。腹の銘文により、江戸時代高岡の経済を牽引した「高岡綿場」の米商人8名が、高岡市須田の瑞雲寺（国泰寺派）に寄進したものと思われる。松楓殿に渡った経緯は不明だが、瑞雲寺は譲吉の妹・節子の嫁ぎ先で、現高岡市中川の県会議員・南兵吉（富山県人初の大臣・南弘の義父）が創建した。その関連で譲吉の手に渡ったものと推測される。

高岡ゆかりの彫刻師「村上九郎作」と松楓殿の家具調度品

〜村上九郎作の高岡彫刻漆器と松楓殿家具制作への思い〜

村上九郎作（1867年〜1919年 小松生まれ）は、彫刻師として金沢で修業していましたが、「明治期デザインの先駆者」納富介次郎によってその才能が認められ、以後、納富の指導のもと、第四回パリ万博、第三回内国勧業博覧会に出品します。

1894年、納富が高岡に創立した富山県工芸学校（現富山県立高岡工芸高校）に招かれ、納富校長と共に当地の伝統工芸、高岡漆器の製法を指導し、産業化に貢献しました。当時の製法やモチーフは現在も受け継がれています。

1900年、村上は山中商会の招きで、輸出用高級家具調度品工場の工場長に就任、製品の輸出を指揮しました。松楓殿の家具の多くは、同商会の1904年セントルイス万博用製品カタログから高峰博士が松楓殿用に特注したものです。

春日式椅子

高岡彫刻塗「二匹鯛」
高岡市立博物館所蔵

出典：村上邦夫著『村上九郎作 生涯記』